

広島大学の歴史

The History of Hiroshima University



広島大学

編集 広島大学文書館
Hiroshima University Archives

広島大学
Hiroshima University

目次

はじめに	1
広島大学の源流	2
原爆と広島大学	4
新制広島大学の発足	6
発足を支えて	8
絶えざる自己変革	10
統合移転でつづる広島大学	12
理念と象徴	14
入試と学生	16
うつりゆく学生生活	18
学生生活のいろいろ	20
教育と研究	22
略年表	24

建学の精神 自由で平和な一つの大学

理念五原則

1. 平和を希求する精神
2. 新たなる知の創造
3. 豊かな人間性を培う教育
4. 地域社会・国際社会との共存
5. 絶えざる自己変革

資料提供のお願い

広島大学文書館では、前身校および広島大学の歴史に関わる資料の収集・保存を行っています。後世のためにお手もとの資料をご提供いただけますよう、お願い申し上げます。

広島大学文書館への交通案内



出典一覧（敬称略）

○テーマ キャプション（出典・提供）

- 広島大学の源流〔文・小宮山道夫〕
広島高等師範学校（『第9回卒業アルバム 心師』）、広島女子高等師範学校（石川博子）、元広島市立工業専門学校校舎（広島市公文書館）
- 原爆と広島大学〔文・菅真城〕
被爆後の復旧作業（広島工業会）、南方特別留学生（『生死の火 広島大学原爆被災誌』）
- 新制広島大学の発足〔文・菅真城〕
開学式正門アーチ（西村博）、設立経費募金ポスター（広島県立文書館）、設立資金募集のためのプロ野球公式試合ポスター（広島県立文書館）、政経学部旧江波校舎（『1955政経学部（夜）第1回卒業アルバム』）
- 発足を支えて〔文・小池聖一〕
広島アメリカ文化センターからの図書寄贈、森戸学長による記念植樹、教職員に見送られて退任する森戸学長、東千田キャンパス（以上4点西村博）
- 絶えざる自己変革〔文・菅真城〕
パリケード封鎖、全共闘と飯島学長との団交（以上2点中国新聞社）、総合科学部旧東千田校舎（『フェニックス—写真が語る広島大学—』）
- 統合移転でつづる広島大学〔文・石田雅春〕
統合移転前の東千田キャンパス（エリオ写真出版）
- 理念と象徴〔文・菅真城〕
森戸学長とフェニックス（西村博）
- 入試と学生〔文・小宮山道夫〕
広島大学合格、若い人に負けない（中国新聞社）、合格電報の受付（中国放送）、合格者には恒例の在校生による胴上げが待ち受けている（中国新聞社）、合格発表風景（中国新聞社）
- うつりゆく学生生活〔文・小宮山道夫〕
鍋を囲んでのゼミコンパ（石田晟）、学生帽（『1956東雲分校卒業アルバム』）、昭和45年の森戸道路にて（大林正昭）、昭和58年の東千田キャンパスにて（『1984広島大学卒業アルバム』）、平成8年の東広島キャンパスにて（『1996広島大学入学アルバム』）、千田町・鷹野橋・皆実町界隈看板あれこれ（『フェニックス—写真が語る広島大学—』）、開学当時の食堂（寺林甲子郎）、東雲寮の生活スナップ（『1955東雲分校卒業アルバム』）、農家の納屋がマイホーム（中国新聞社）
- 学生生活のいろいろ〔文・小宮山道夫〕
第3回フェニックス駅伝（『フェニックス』創刊号）、天皇杯に出場したサッカー部（沖原謙）、東千田サークル棟でのチェロの練習（『1993広島大学卒業アルバム』）、「オリキャン」の名物ともなった仮装（『1990広島大学入学アルバム』）、総勢2,457名におよぶ参加者で行われた「オリキャン」（西村清巳）
- 教育と研究〔文・小宮山道夫〕
南極観測隊における学術調査（柏谷博之）、講義風景（『1955東雲分校卒業アルバム』）、新入生に「楽勝」単位を伝授する広大壁新聞（中国新聞社）、実験風景（エリオ写真出版）

なお、特に出典を記載していない写真は学内諸部局で所蔵するものや文書館に移管を受けたものである。提供や移管に当たってご協力頂いた担当者各位に謝意を表したい。

あ と が き

広島大学文書館は、国立大学法人化とともに国立大学で二番目に設置されました。公文書室・大学資料室を中心に、森戸辰男記念文庫、平和学術文庫、梶山季之文庫等の特殊文庫を擁し、法人文書の管理・公開を行い、広島大学に関連する史資料を広く収集し、教育・研究に活用しております。一般の方もご利用できますのでお気軽にお寄りいただければ幸いです。また、前身諸学校を含め、関係する資料（ノート、制服etc）がありましたら、是非ともご寄贈いただければ幸いです。

広島大学文書館は、ローカルな個性こそがグローバル化に最も必要なことだと考えております。ぜひ、ご支援・ご鞭撻の程、宜しく願いいたします。

広島大学文書館
館長 小池 聖一

広島大学の歴史

編集 広島大学文書館
〒739-8524 広島県東広島市鏡山1丁目1番1号
TEL 082-424-6050 FAX 082-424-6049
E-mail : bunsyokan@office.hiroshima-u.ac.jp
http://home.hiroshima-u.ac.jp/hua/
発行日 2015年9月30日 改訂第4版
発行 広島大学文書館
印刷 株式会社ニシキプリント

目次

はじめに	1
広島大学の源流	2
原爆と広島大学	4
新制広島大学の発足	6
発足を支えて	8
絶えざる自己変革	10
統合移転でつづる広島大学	12
理念と象徴	14
入試と学生	16
うつりゆく学生生活	18
学生生活のいろいろ	20
教育と研究	22
略年表	24

建学の精神

自由で平和な一つの大学

理念五原則

1. 平和を希求する精神
2. 新たなる知の創造
3. 豊かな人間性を培う教育
4. 地域社会・国際社会との共存
5. 絶えざる自己変革

はじめに

広島大学は、我が国でもっとも多く前身校を持つ大学です。前身諸学校の中では、広島師範学校（昭和18年設立）の前身の白島学校が明治7(1874)年にもっとも早く設立されました。その後、明治20年に広島高等女学校、明治35年に広島高等師範学校、大正9(1920)年に広島高等工業学校、大正11年に広島県実業補習学校教員養成所、大正12年に広島高等学校、昭和4(1929)年に広島文理科大学、昭和20年に広島市立工業専門学校、広島県立医学専門学校が設立されて、今日の広島大学の基礎となりました。これらの学校では各分野の専門家や教員の育成を行い、地域のみならず全国へ優秀な人材を輩出して参りました。

これら多くの前身校が統合され、今日の広島大学になるまでには様々な紆余曲折がありました。とりわけ大きな出来事は、昭和20年の原子爆弾投下という人類最初の悲惨な出来事でした。このことにより多くの前身諸校の生徒、教職員が被害に遭われました。わたしたちは、犠牲となられた方々の人生と学問への希望を受け継いでいかなければなりません。広島大学の建学の精神である『自由で平和な一つの大学』は、現在も脈々と受け継いでいます。その後、大学紛争、東広島へのキャンパスの統合移転、国立大学法人化などを経て、我が国有数の国立大学へと成長して参りました。卒業生の数も多く、新制広島大学となってからすでに17万人以上の卒業生を送り出しています。

この冊子は、原爆の廃墟から不死鳥の様に立ち上がった広島大学のあゆみ、本学の理念と象徴、学生生活の移り変わり、教育と研究、などを概観しています。これによって、私ども広島大学の発展の足跡を知り、建学の精神を理解し、その上で広島大学の未来に想いを巡らしていただくことで、構成員を始め関係者の共通認識に役立つことになれば幸いです。



広島大学長

越智 光夫

広島大学の源流



広島高等師範学校（広島市東千田町・大正3年頃）



広島文理科大学（広島市東千田町・創設当時）



広島文理科大学理論物理学研究所（竹原市・昭和24年頃）



広島工業専門学校（広島市千田町・創設当時）



広島高等学校（広島市皆実町・昭和3年頃）

広島大学は、日本で最も多くの前身校をもつ大学でした。

広島高等師範学校は広島大学教育学部の源流です。明治35(1902)年、全国で2校目の中等教員養成機関として創設され、「教育の西の総本山」とも称されました。この高師の大学昇格運動の過程で昭和4(1929)年に設置されたのが広島文理科大学でした。文理大は広島大学文学部、理学部、そして教育学部の一部の基礎をなしました。全国に2校設置され、高師の教員をはじめ主に高等教育機関の教員および研究者を輩出しました。また、文理大に附置されていた理論物理学研究所は、当時学界で注目されていた波動幾何学の実績により昭和19年に設置された附置研究所でした。

広島工業専門学校は広島大学工学部の基礎をなしました。大正9(1920)年に広島高等工業学校として創設され、工学科、電気工学科、応用化学科と、のちに醸造学科を加えた4学科をもち、地域の工業指導者養成に寄与しました。法改正により昭和19年に校名を変更しています。

広島高等学校は広島大学教養部（皆実分校）の基礎をなしました。大正12年12月に設置された最後の官立高等学校です。卒業生の多くは東京帝国大学をはじめとする帝国大学に進学しました。

広島女子高等師範学校は教育学部福山分校の基礎をなしました。日本で3校目の女子高等師範学校として昭和20年に設置されました。明治20年創立の私立山中高等女学校の寄付により設置の実現をみた女子のための高等教育機関です。

広島師範学校は広島大学教育学部東雲分校および同三原分校の基礎をなしました。前身諸学校のうち最も創立が古く、明治7年に白鳥学校の名で広島東白鳥町（現広島市中区東白鳥町）に創設されました。長らく県立の中等教育機関として小学校教員を養成し、昭和18年には官立学校となりました。

広島青年師範学校は広島大学教育学部福山分校および水畜産学部の基礎をなしました。大正11年に設置された広島県実業補習学校教員養成所がその前身です。勤労青年に対する補習教育を目的とする実業補習学校（のち青年学校）の教員を養成する学校で、男子は農業科、女子は家政科を学びました。昭和19年に官立学校となります。

広島市立工業専門学校は広島大学工学部の一部の基礎をなしました。当時不足していた高級技術者の養成を目的に昭和20年に機械科・航空機科の構成で創設されました。

広島医科大学（新制・県立）は昭和28年に広島大学に併合され医学部の基礎をなしました。昭和20年に創設された広島医学専門学校を前身とし、昭和23年に医大となり、昭和27年に新制大学として設立されました。地域の医師養成を担った教育機関です。

以上9校におよぶ前身諸学校のほとんどは、堅実な人材として社会で活躍する、いわば即戦力の実務家を養成する学校だったといえます。このように伝統、校風、教育課程の異なっていた諸学校を、いかにひとつの大学としてまとめるかが、戦後の復興とならぶ広島大学の重要な課題でした。



広島県広島師範学校（広島市皆実町・昭和12年頃）



広島青年師範学校（安芸高田市吉田町・創設当時）



元広島市立工業専門学校校舎（広島市東雲町・昭和26年頃）



広島女子高等師範学校（呉市安浦町・昭和23年頃）



広島医科大学（呉市阿賀町・昭和23年頃）

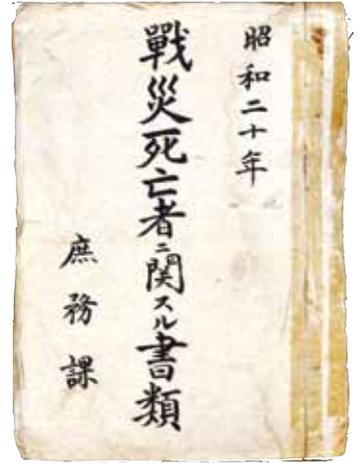
原爆と広島大学

昭和20(1945)年8月6日午前8時15分、人類最初の原子爆弾が広島市に投下されました。当時、広島大学の前身諸学校の多くは、爆心地から1~4キロメートルの範囲に点在していました。最も爆心地に近かった広島高等師範学校・広島文理科大学(広島市東千田町)では、木造校舎は瞬時に倒壊し全焼、鉄筋コンクリート造りの大学本館も一部を除いて全焼しました。最も爆心地から遠かった広島師範学校(広島市東雲町)でも、校舎は半壊しました。児童・生徒・学生や教職員も、自宅、下宿、勤労働員先や校内などで被爆しました。広島大学関係者の原爆死没者数は、大学として確認しているだけでも、昭和20年末までに676名(教職員92名、学生・生徒・児童584名)にのぼります。

前身校中最も多く原爆犠牲者を出したのは、広島女子高等師範学校附属山中高等女学校(山中高女)です。山中高女の1・2年生は、広島市役所付近の広島市雑魚場町で勤労働員中に被爆し、ほぼ全員が亡くなりました。

原爆の犠牲になったのは、日本人ではありません。当時、広島文理科大学、広島高等師範学校にはアジアからの留学生が在籍していました。中国、モンゴルからの留学生は、被爆時に37人以上おり、このうち3人の被爆死

戦災死亡者二関スル書類



が確認されています。また、東南アジアの各地からは、(大東亜)「新秩序建設ノ理想ノ実現コソ又彼等ノ母国ノ繁栄ノ至善ノ道ナル所以ヲ感得シテ率先我ニ協力セントスル人材ヲ養成スル」という占領政策上の目的で名家の子息から選抜・招致された「南方特別留学生」が在籍していました。彼らのうち、ニック・ユソフとサイド・オマール(ともに現マレーシア出身)が被爆により死亡しました。

戦後、広島大学関係者は、原爆・平和問題に取り組みました。例えば、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という原爆死没者慰霊碑(広島平和都市記念碑)の碑文を撰述・揮毫したのは、雑賀忠義教養部教授でした。



日赤広島病院

鷹野橋から御幸橋にいたる電車道

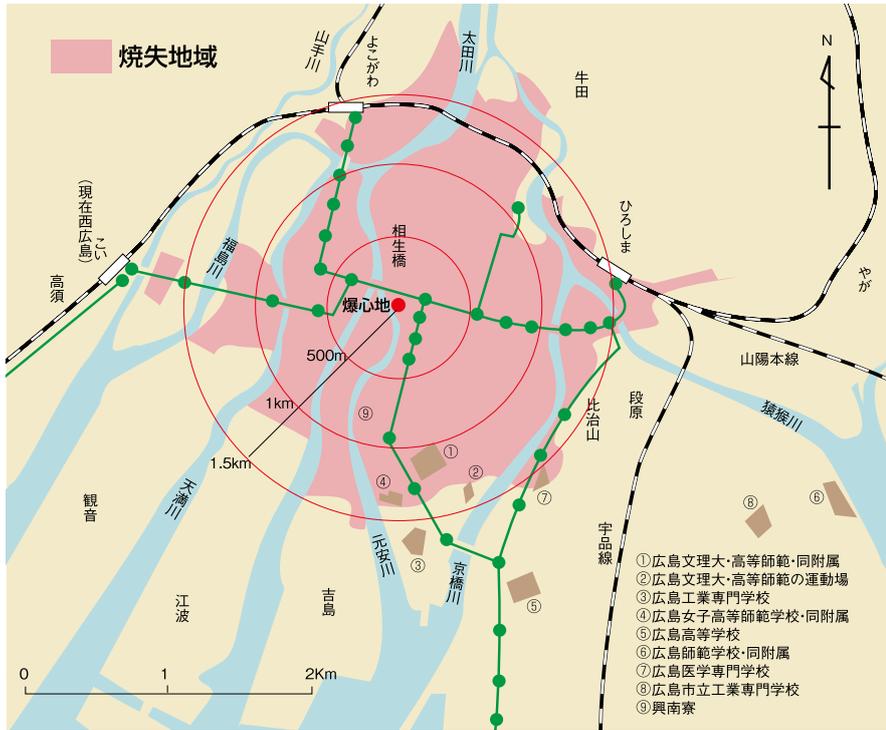
被爆後の広島文理科大学付近



南方特別留学生



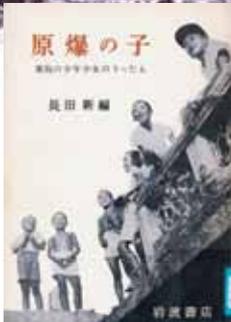
雑賀忠義揮毫による色紙



前身諸学校の位置と被害状況



被爆後の復旧作業（広島工業専門学校）

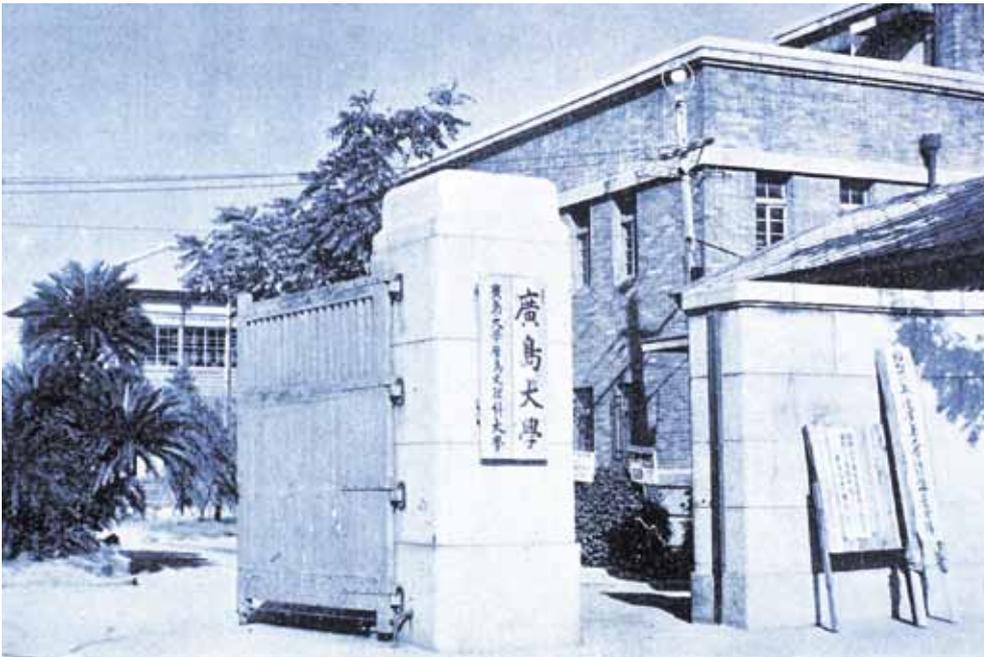


長田新
教育思想史の権威。広島で被爆した同氏編集による『原爆の子』は十数カ国に翻訳され全世界に感銘を与えた。



原爆放射線医学研究所（霞キャンパス）
原子爆弾の放射能による障害の治療、および予防に関する学理を研究・応用するために昭和36年設置された。

新制広島大学の発足



発足時の正門（昭和26年）



国立広島総合大学設置申請書



設立経費募金ポスター

戦前において、複数の学部を有する総合大学は7つの帝国大学のみであり、残りの大学はすべて単科大学でした。広島県には昭和4(1929)年に設置された広島文理科大学があるのみであり、第8帝国大学を誘致しようという運動がありましたが、戦前において実現することはできませんでした。

戦後の教育改革のなかで、昭和22年12月にはCIE（民間情報教育局）から国立大学地方委譲案が提示されました。これは、7つの帝国大学に3大学を加えた10大学を除き、国立大学を地方に移譲するというものでした。この案は昭和23年1月末頃には立ち消えになりましたが、この間中国地方では、広島と岡山が激しい総合大学誘致合戦を繰り広げました。昭和23年7月には、新制国立大学実施要綱11原則がCIEから文部省に提示され、各府県に原則として都道府県名を冠した国立大学が設置されることになりました。昭和24年5月31日に国立学校設置法が公布施行され、新制国立大学69校が設置されました。こうして新制「広島大学」は誕生したのです。

新制広島大学を設置するにあたっては、昭和22年12月に国立広島総合大学設立推進本部（本部長は楠瀬常猪広島県知事）が県庁内に設置され、昭和23年1月には広島総合大学設立期成同盟会（会長は小谷伝一広島県議会議長）結成され、国立広島総合大学設立運動が県民一体となって展開されました。

国立大学だから広島大学を設立するためのお金は国費でまかなわれたと考えられがちですが、実はそうではありません。広島大学創設に必要な3億4000万余円の三分の一は県費で、残り三分の二は寄付金によって賄われたのでした。

また創設資金を集めるためにプロ野球の公式試合の開催や宝くじの発売なども行われました。



設立資金募集のためのプロ野球公式試合ポスター



開学式正門アーチ (昭和25年)



政経学部旧江波校舎
政経学部（現在の法学部と経済学部）は、地元県民の強い要望と総合大学に社会科学系の学部が不可欠との認識のもとに新設された。
昭和32年に東千田に移転するまで広島市江波町の広島商業高等学校跡にあった。



呉市阿賀町当時の医学部正門付近 (昭和30年)
新制大学発足当初からの懸案であった広島医科大学（県立）の国立移管は昭和28年に実現した。
昭和32年には呉市から広島市霞町へ移転することとなった。

発足を支えて

～ 森戸辰男・皇至道・川村智治郎 ～



初代学長 森戸辰男

初代学長森戸辰男にとって大学とは、東京帝国大学に象徴される「象牙の塔」と、新渡戸稲造に薫陶を受けた旧制第一高等学校における人格形成教育・教養教育の二つのイメージを持っていました。そして、森戸は、大阪労働学校における労働者教育によって「社会に開く教育」も実践していました。

森戸が初代学長に就任する前の広島大学は、昭和24(1949)年7月に開学したものの、一年近く学長が決まらず、学長不在のままでした。そのようななか初代学長にと白羽の矢がたった森戸は、広島大学の開学にあたり、片山・芦田内閣の文部大臣として広島大学からの陳情書を受け取る立場にありました。森戸は、広島大学長に就任するため、衆議院議員を辞職するにあたり、特に許されて衆議院本会議で発言しました。このなかで森戸は、広島大学に行く理由として、①郷土からの就任要請、②日本の再建は青年の向背にかかるとの確信、③平和都市広島にふさわしい大学を作りたい、の三点をあげています。

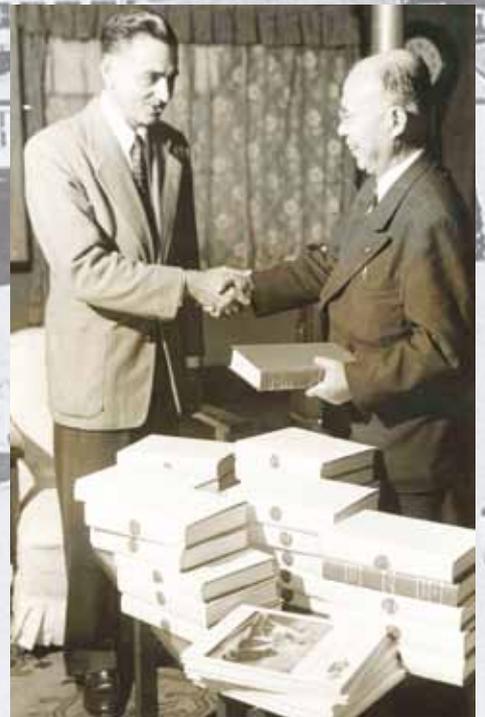


森戸学長による記念植樹

そして、昭和25年11月5日、開学式で森戸学長は「変革期の大学」と題する講演を行い、後に建学の精神となる「自由で平和な一つの大学」の原型を示しました。森戸学長は、東千田キャンパスへの統合を促進し、また、平和な大学をめざして、平和関係図書と緑を復興させるため世界各国の大学に寄贈・寄付を求め、前者は平和文庫に、後者は大学の緑化につながっていきました。そして、フェニックスをあしらった学章と、復興を象徴する緑色を下地とする学旗を定めたのです。

森戸は現実的平和論を提唱し平和のもつ普遍性を追求しようとし、時に「ヒロシマ」の平和とも対立したのです。また、森戸学長は、大学協団体論を主張して、政治化しつつある当該期の学生運動と対峙し、新渡戸の「人格形成教育」の実践と通信教育講座に見られる社会に開く大学と学生の育成に努めたのです。

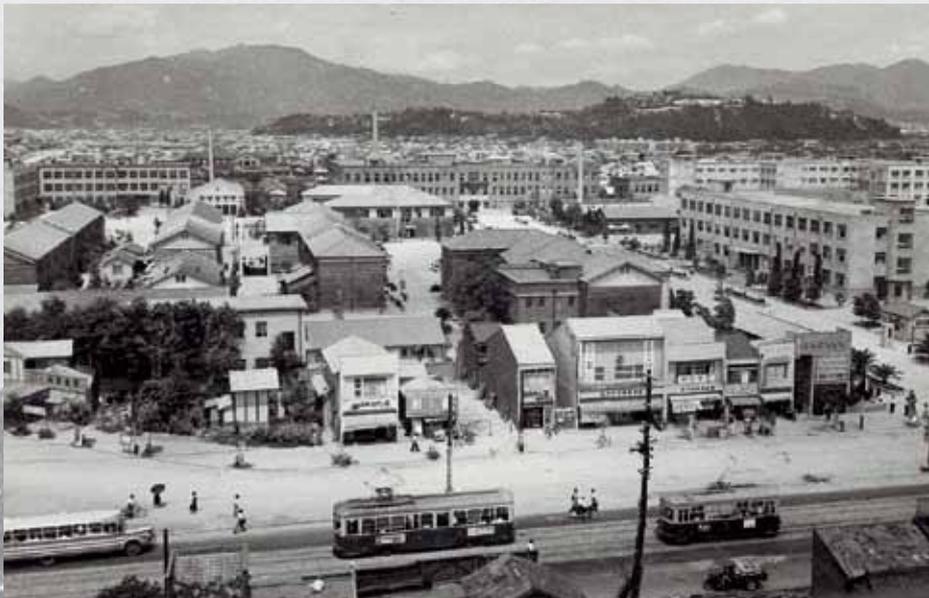
昭和38年3月、約13年間の学長任期を終えて退任するにあたり、森戸学長は、①平和建設のための科学研究者養成、②民主的人間形成・人づくり、③日本の不安・危機のなかでの国内指導者養成、の必要性について述べ、広島大学を後にしたのでした。森戸は、その後も中央教育審議会会長、日本育英会会長等を歴任し、日本の教育界および大学改革に影響を与えたのです。



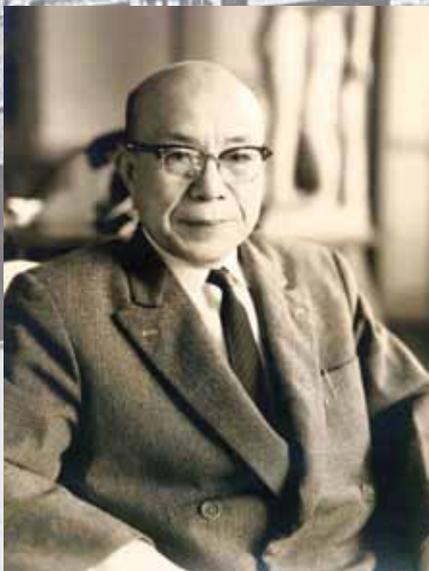
広島アメリカ文化センターからの図書寄贈



教職員に見送られて退任する森戸学長



東千田キャンパス（昭和30年代）
写真ほぼ中央の木造と鉄筋の複雑な建物は、旧
広島文理科大学の書庫を引き継いだ附属図書
館。昭和31年には理学部校舎西側に附属図書
館の新築工事が始まる。



第2代学長 ^{トシ} 皇至道



第3代学長 ^{としじろう} 川村智治郎

この森戸学長の後を継いだのは、
行政経験豊かな皇至道です。大学研
究の第一人者でもあった皇学長は、
大学整備計画を推進し、歯学部等
の設置を行いました。入試問題漏洩
事件の道義的責任をとって任期途中
に辞任しました。第三代学長は、両
生類研究の世界的権威であった川
村智治郎です。川村学長も大学の整
備・拡充に尽力しましたが、おりか
らの大学紛争のなか、任期途中で辞
職を余儀なくされました。



昭和43年度までの旧本部管理棟
開学時の本部管理棟は文理大のものを引きつ
だが、昭和25年3月に火災により焼失した。写
真は後に再建されたもの。いつの時代も事務
局は大学の教育・研究を支えている。

絶えざる自己変革

～ 飯島宗一から越智光夫まで ～



第4代学長 飯島宗一



第5代学長 竹山晴夫



第6代学長 頼実正弘



第7代学長 沖原豊



第8代学長 田中隆荘



第9代学長 原田康夫



第10代学長 牟田泰三



第11代学長 浅原利正



第12代学長 越智光夫

第4代学長飯島宗一は、大正11(1922)年長野県生まれ、名古屋帝国大学医学部を卒業後、名古屋大学医学部助教授等を経て、広島大学医学部教授になりました。昭和44(1969)年、46歳で広島大学長となり、2期8年間学長を務めました。

第5代学長竹山晴夫は、大正4年福岡県生まれ、広島高等師範学校・広島文理科大学卒業後、広島大学理学部教授等を経て、広島大学理学部長となりました。昭和52年、61歳で広島大学長となり、1期4年間学長を務めました。

第6代学長頼実正弘は、大正8年広島県生まれ、広島高等工業学校・東京工業大学卒業後、広島大学工学部教授等を経て、広島大学評議員、同工学部長となりました。昭和56年、61歳で広島大学長となり、1期4年間学長を務めました。

第7代学長沖原豊は、大正13年山口県生まれ、広島文理科大学中退後、広島大学教育学部教授等を経て、広島大学学生部長、同評議員、同教育学部長を務めました。昭和60年、60歳で広島大学長となり、1期4年間学長を務めました。

第8代学長田中隆荘は、大正14年広島県生まれ、広島高等師範学校・広島文理科大学卒業後、広島大学理学部教授等を経て、広島大学評議員、同理学部長となりました。平成元(1989)年、63歳で広島大学長となり、1期4年間学長を務めました。

第9代学長原田康夫は、昭和6年広島県生まれ、広島大学大学院医学研究科修了後、広島大学医学部教授等を経て、広島大学医学部附属病院長、同医学部長を務めました。平成5年、62歳で広島大学長となり、2期8年間学長を務めました。

第10代学長牟田泰三は、昭和12年福岡県生まれ、東京大学大学院数物系研究科修了後、京都大学理学部助手等を経て、広島大学評議員や同理学部長を務めました。平成13年、63歳で広島大学長となり、2期6年間学長を務めました。

第11代学長浅原利正は、昭和21年広島県生まれ、広島大学医学部医学科卒業後、広島大学医学部教授等を経て、広島大学病院長や同大学教育研究評議会評議員を務めました。平成19年に広島大学長となり、3期約8年間学長を務めました。

第12代学長越智光夫は、昭和27年愛媛県生まれ、広島大学医学部医学科卒業後、島根医科大学教授等を経て、広島大学病院長や同大学学長特命補佐となり、平成27年に広島大学長に就任しました。

飯島学長以降、広島大学は大学改革、統合移転、国立大学の法人化という大きな変革を経験しました。その出発点となったのが大学紛争でした。同時期に日本の大学の多くは何らかの紛争を抱えていましたが、広島大学は特に紛争の激しい学校の一つに数えられていました。こうした紛争の反省をふまえ、その原因を克服するために広島大学は自主的に大学改革や統合移転を決定・推進したのでした。

また、国立大学法人法の成立にともない平成16年4月、全国の国立大学は法人化しました。従来に比べて個々の大学は自由な運営が可能になった一方で、社会に対してより大きな責任を負うこととなりました。こうした状況をうけて「絶えざる自己変革」を理念の一つに掲げる広島大学は、さらなる飛躍をめざして日々努力しています。



バリケード封鎖 (昭和44年3月)
封鎖された正門に「広島解放大学」
の看板が掲げられている。



炎上する学生集会所
機動隊による封鎖解除の行われた昭和44年8月17日、学生の投下した火炎ビンにより本部横の学生集会所が炎上した。



全共闘と飯島学長との団交 (昭和44年5月2日)
約2,500名が参加して第1回目の団交が行われた。全共闘の封鎖戦術と学長の封鎖解除要求という対立点が明確化した。



国際協力研究科校舎
広島大学初の独立研究科として平成6年に設置された。



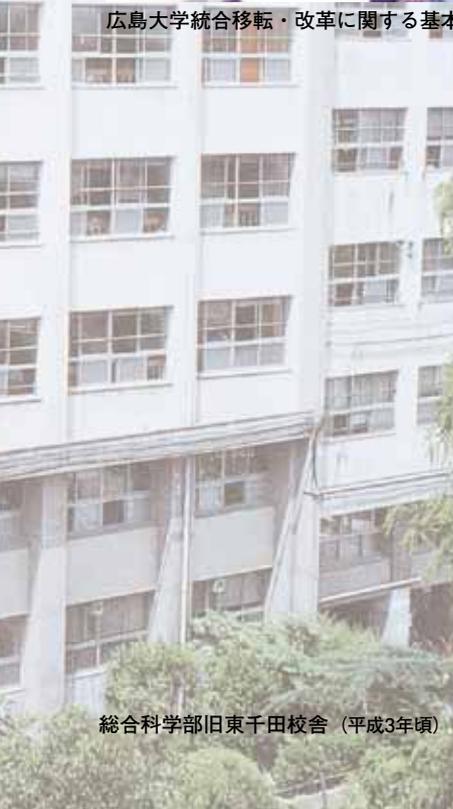
先端物質科学研究科校舎
自然系大学院整備の一環として平成10年に設置された。



広島大学統合移転・改革に関する基本計画委員会 (昭和48年9月)



サタメモリアルホール
平成15年5月完成。広島大学創立50周年記念事業の一環として建設された。



総合科学部旧東千田校舎 (平成3年頃)

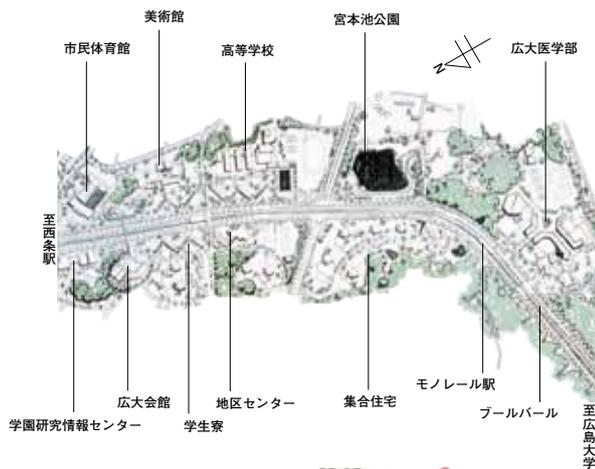


創立50周年記念式典 (平成11年11月5日)



国立大学法人発足 (平成16年4月)

統合移転でつづる広島大学



プールバールイメージ図
 『賀茂学園都市建設基本調査』（昭和50年、建設省都市局・広島県・(株)都市環境研究所）では、モノレールが走るプールバール沿いに、「広大医学部」が配されていた。



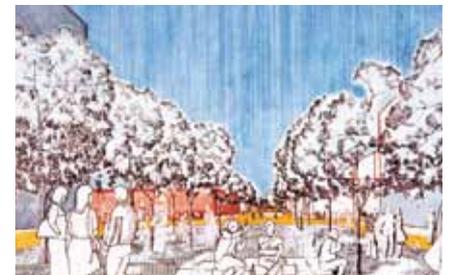
統合移転前の東千田キャンパス



アカデミック地区施設配置計画
 1次案とイメージスケッチ
 (昭和53年成案)



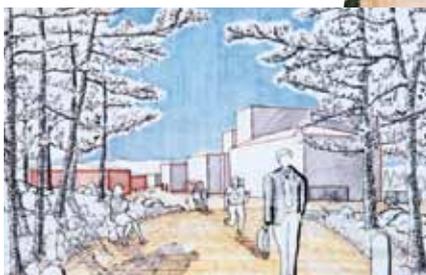
③理学部から南へ通ずるアプローチ道路



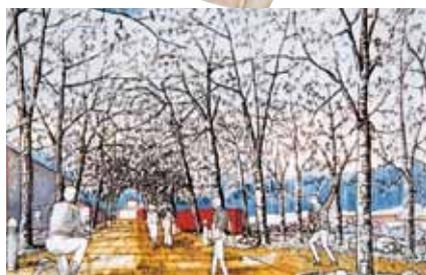
⑥北地区の中央歩行者道路（理学部前）



④教育学部（右）と学校教育学部（左）の間の広場



⑤総合科学部へ北からのアプローチ



⑦学校教育学部へ
 西からのアプローチ



西条視察風景 (昭和51年3月1日)
眼前にはぶどう畑が広がっている。移転予定地は、大部分を占める山林に囲まれて、数戸の農家とぶどう畑、田畑が点在していた。



工学部だけの東広島キャンパス
移転が実現した昭和57年当時の写真。工学部の一画以外はさら地と林ばかりであった。当時の工学部の苦労がしのばれる。



中央図書館
故丹下健三氏の設計による。統合移転を機に各学部に分散していた図書の集中化が図られた。

広島大学は多くの学校を包括して発足したため、県内各地にキャンパスが分散していました。そこで昭和30年頃からキャンパスの整理・統合を進めてきました。しかしながら大学の発展に伴い、次第にそのキャンパスの狭隘さが問題となってきました。こうしたなか大学紛争を契機として広島大学は改革に着手しましたが、その過程で改めてキャンパスの狭さが障害として認識されるようになりました。

そこで大学は適地の選定・調査にのり出し、昭和47(1972)年7月に可部、五日市、西条の三カ所に移転候補地を絞り込みました。昭和48年2月8日、飯島宗一学長は、大学を賀茂郡西条町御園宇地区(当時)へ統合・移転することを決定しました。

こうした大学の動きにたいして広島県は、全面的に協力する姿勢を見せました。昭和48年2月に広島県は学園都市建設対策本部を発足させて体制を整えとともに、翌昭和49年4月には「賀茂学園都市建設基本構想」を発表し、国や東広島市と協力しながら賀茂地区の総合開発にのり出したのでした。

具体的には、新幹線東広島駅の設置、上水道の整備、国道2号線および375号線バイパスの建設、近畿大学工学部の誘致、サイエンスパークの整備、工業団地の建設とハイテク産業の誘致、下見学生街の整備などがあげられます。このため東広島市は大学を中心として大きく発展し、市制施行当時(昭和49年)に約6万4千人だった人口は、平成17(2005)年の町村合併をへて約18万4千人(平成26年度末)に達しています。

昭和49年に大学と県はキャンパス予定地の調査・測量を開始し、移転のための準備を本格的に開始しました。そして昭和57年には全学の先頭を切って工学部が移転しました。ただ、用地買収の難航、上下水道などのインフラ整備、広島市内の跡地処分の方法などの諸問題を解決するために時間がかかり、昭和60年度に移転完了とされた当初の計画は五度にわたって見直されました。このため実際に移転計画が完了するまでに24年もの歳月がついやされたのでした。

統合移転学部等移転年次計画

建物整備期間 ■ 当初計画 53.7.11 ■ 一部修正 55.9.9 ■ 全体計画修正 58.1.18
■ 一部修正 58.5.24 ■ 全体計画 61.4.15 ■ 現計画 2.5.15 移転時期 ㊦

区分	昭和54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元年度	2	3	4	5	6	7
事務局・学生部																	㊦
附属図書館				㊦													㊦
総合科学部																	㊦
文学部																	㊦
教育学部																	
学校教育学部																	㊦
法学部																	㊦
経済学部																	㊦
理学部																	㊦
工学部				㊦													
生物生産学部																	㊦
農場																	
各種センター類																	
その他																	

理念と象徴



森戸道路
(旧東千田キャンパス)

国立大学法人広島大学はその中期目標のなかで、基本的な理念として「『自由で平和な一つの大学』という開学以来の精神を継承し、①平和を希求する精神、②新たな知の創造、③豊かな人間性を培う教育、④地域社会・国際社会との共存、⑤絶えざる自己変革、という理念5原則の下に、国立大学としての使命を果たす。」とうたっています。

理念5原則が制定されたのは、平成7(1995)年のことです。しかし、この理念は平成の時代になって突然決められたものではありません。森戸辰男初代学長は、広島大学の開学式(昭和25年11月5日)の式辞において、「民主的で平和な『一つの世界』」を待望するわれわれが、「民主的で平和な『一つの祖国』」を建設する精神的基礎をなすために、「自由で平和な『一つの大学』」を実現することを目指すと述べました。また、森戸学長は広島大学を①中国・四国地方の中心大学、②地域性のある大学、③国際性のある大学にすることを目指しました。

広島大学を象徴する植物はフェニックスです。不死鳥の名を持つこの木は、ウエスレイヤン大学(米国)からの寄付金をもとに、原爆から復興する広島大学の象徴として、東千田キャンパスの正門前に植えられました。

広島大学発足時には、学章や学歌は存在せず、それらがつくられたのは昭和30年代になってのことであり、学生たちから公募しました。フェニックスの葉がデザインされた学章が制定されたのは、昭和31年です。昭和32年に制定された学歌にも「緑ありつよき不死の樹」とフェニックスがうたわれています。昭和35年に制定された学旗には、「生々の色、希望の色、平和の色」である「緑」が使われました。これらのシンボルには、「寄り合い世帯である大学の精神的な一体化」の実現、すなわち「自由で平和な『一つの大学』」の実現という意味が込められています。



広大バッヂ



森戸学長とフェニックス



広島大学歌

1. 光あり

遠き山なみ 輝きて
新たなる日は ひらけたり
ああわれら
はてなき空に かたちなす
真^{まこと}をぞ きはめん望みなり

2. 流あり

古き歴史は 七筋に
わかれてとはに 伝へたり
ああわれら
移らふ時に かはらざる
善^よきをこそ 努^{つと}めん集ひなり

3. 緑あり

つよき不死の樹 広ごりて
葉末は風に そよぎたり
ああわれら
明るき道に 影しるす
美^はしきもの 求めん願ひなり



広島大学旗

植樹時のフェニックス



第1回卒業式（附属小学校講堂）

昭和28年3月25日、新制広島大学第1回卒業証書授与式が行われ、714名が卒業した。この時森戸学長は「平和の戦士を生活の場にする」心持ちであると述べた。

入試と学生

広島大学入学

新制大学の入学者選抜は、学力検査・身体検査・調査書・進学適性検査で構成され、それらを総合して合格者が決定されました。広島大学では募集人員1,455名に対し2,732名の志願者があり、試験により女子88名を含む1,279名が合格しました（昭和24年）。この年の大学生は全国で約9万人、大学進学率は約5.3%程度に過ぎませんでした。その後、進学率は年々上昇を続け、昭和50（1975）年の大学・短大進学率は38%になり、平成11（1999）年には49.1%に達しました。この進学率の上昇とともに入試制度も変容しました。

入試制度は昭和54年に、共通一次学力試験を導入して大きく変わりました。難問奇問の存在が問題視されはじめた個別大学の入試を改善する目的で導入されたこの試験も、受験生の輪切り選別が進むなどの批判をあげました。その後の入試制度は、推薦入試の実施、受験機会複数化（昭和62年）、分離分割制度の導入（平成元年）、センター試験の導入（平成2年）と猫の目のように変わりました。広島大学の推薦入試は昭和54年に経済学部第二部および水畜産学部においてはじめて実施され、合計9名が入学しました。

進学率の上昇は学生の多様化をもたらしました。とくに女子学生数は飛躍的に増加しました。広島大学でも、昭和24年度に86名（7%）だった女子は、70年代の中頃まで順調に増加し、その後やや停滞したものの発足から50年がたった平成11年には40%を超えるようになりました。また、戦後の学制改革により新制大学と新制高校が直結したことで、入学者の実年齢も下がりました。最後の広島文理科大学入学志願者（昭和25年度）の平均年齢は24歳6カ月でしたが、新制広島大学学生の年齢はそれよりはるかに若くなりました。

学生の出身地にも、変化がありました。新制大学は発足当初、地域の高等教育機関という性格を持っていました。広島大学でも広島県外出身者は半数以下でしたが（昭和24年、38%）、次第に全国から学生が集まり、平成11年には4分の3を占めるようになっていきます。

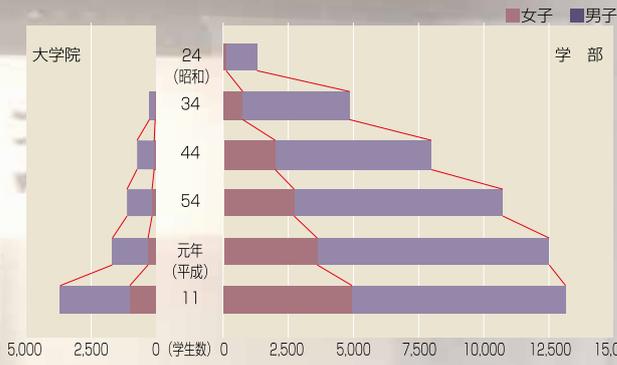
また、博士課程完成時に242名（昭和32年、学部生の5%）だった大学院生は、3,384名（平成10年、同25%）に達しました。さらに生涯学習社会を背景に、社会人の学部・大学院入学や、国際化を反映して留学生なども多数入学してくるようになっていきます。留学生の出身国としては、中華人民共和国が全体の54%でトップ、以下、インドネシア・大韓民国と続き、アジア地域で89%を占めています（平成27年度統計）。

キャンパスは、多様な学習歴と国籍を持つ学生たちであふれ、大学教師たちの仕事も、研究だけでなく多様な教育活動に広がっています。



広島大学合格、若い人に負けない（『中国新聞』昭和61年3月16日）

入学者数の推移



合格電報の受付
(旧東千田キャンパス・昭和53年)



合格者には恒例の在校生による胴上げ
が待ち受けている
(旧東千田キャンパス・平成7年)

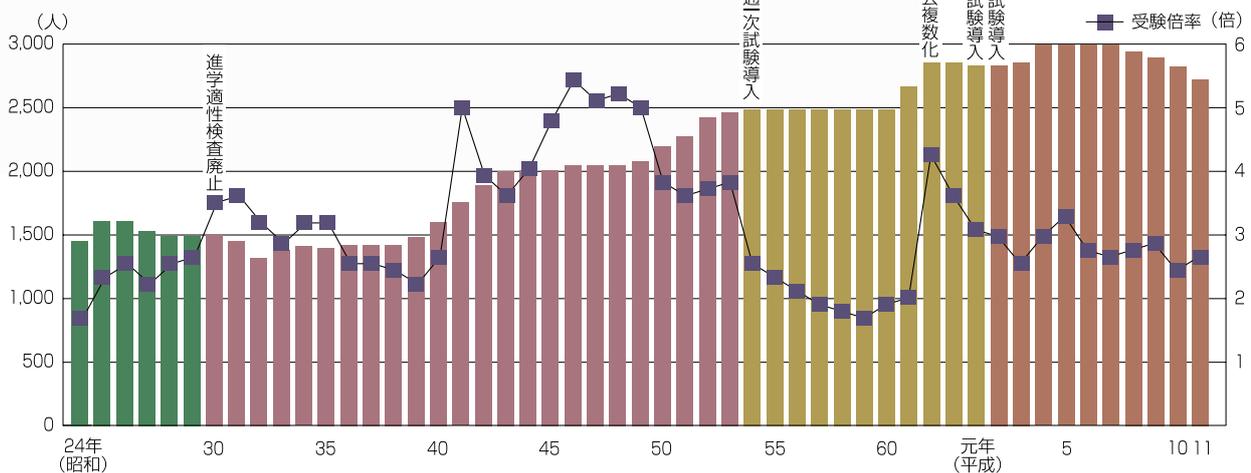


合格発表風景 (旧東千田キャンパス・平成6年)



広島大学の留学生たち

入学定員と受験倍率の推移



うつりゆく学生生活



鍋を囲んでのゼミコンパ（昭和28年）



昭和45年の森戸道路にて
長髪の学生も見られる



昭和58年の
東千田キャンパスにて



ピアスをした男子学生と髪を染めた男子学生
(平成11年の授業中)



平成8年の東広島キャンパスにて

学生の服装は時代の変化とともに大きく変わりました。広島大学発足の頃、キャンパスでは大学生の象徴「角帽に学生服」姿の男子学生と、ブラウスにロングスカート姿の女子学生の姿が主流でした。昭和40年代の大学紛争を境に学生の服装はかわり、男子学生の間では長髪にジーンズ、スニーカーといった姿が目につくようになりました。また女子学生の間ではミニスカートやパンツルックが増加しました。現在では「茶髪にピアス」姿も珍しくなくなりました。

学生の食生活の質も変化しました。広島大学の開学当時の食堂では米飯販売が禁止されていた時代のため牛乳・パン・うどん・ふかし芋などメニューは限られましたが、食糧事情の悪さと安さのため多くの学生が利用しました。安くてボリュームのある学食は、いつの時代も学生たちの強い味方です。平成27(2015)年現在、学内で広大生に毎日の食事を提供しているのは、11店舗（うち10店が生協直営、1店が一般業者）でカフェやコンビニエンスストアもあります。おかずを自由に選ぶカフェテリア方式が主流になっています。東広島キャンパスでは、平日に延べ約7,800食の需要があり、昼休みに集中する学食の利用は、連日、長蛇の列を生み出しています。

学生の住環境にも大きな変化が訪れました。昭和20年代の厳しい住宅事情などを反映して、自宅生が約半数を占めていましたが、県外出身の学生が増加するにつれ、寮・間借・下宿の需要が高まりました。14畳の広さに6人が生活する学生寮や、3畳の貸間も珍しくはなく、食事付きの下宿では学生は家族の一員でした。東広島市への移転後は、新築のアパートが学生の住居となりました。風呂・トイレ・台所共用の時代から、バス・トイレはもちろん、フローリングで冷暖房完備が当たり前の時代へ、住環境の充実度には目覚ましいものがあります。その反面、ドアで仕切られたアパートでは、学生間の交流が希薄になったともいわれます。

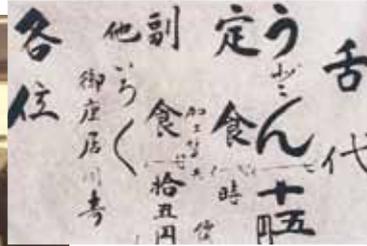
また、かつて学生下宿の集中していた広島市内の皆実・翠・千田町界隈には、学生街がありました。喫茶店・食堂・お好み焼き屋・飲み屋・屋台・本屋・古本屋・質屋・ダンスホール・映画館・パチンコ店・雀荘・ビリヤード店・ボウリング場・風呂屋……。時代により学生街の店にも盛衰がありましたが、店はなじみの学生を卒業後も暖かく迎え、学生にとって店は学生時代の思い出の場所ともなっていました。東広島市への統合移転によって、もともとのどかな農業地帯だったキャンパス周辺には、住宅、商業・サービス施設など生活に必要な施設が不足がちだったため、大学北側に見下ろす学生街が整備されました。スーパー・コンビニ・弁当屋・食堂・飲み屋・カラオケボックス・ゲームセンター・パチンコ店・レンタルビデオ店……。これらの店は、学生たちの貴重なコミュニケーションの場となっています。



千田町・鷹野橋・皆実町
界隈看板あれこれ



下見学生街看板あれこれ



開学当時の食堂
(東千田キャンパス)
ミルク、サイダー、おかず物、天ぶらうどん、かやくうどん、牛乳といったメニュー札が掛かっている。



お昼の行列 (生協西2食堂・平成7年)



東雲寮の生活スナップ (昭和30年代)



農家の納屋がマイホーム
昭和57年、工学部が東広島に移転したが、下宿は不足していた。地元農家では、納屋や、屋根裏部屋を改造して提供したところもあった。



学生マンション (平成11年)

学寮一覧

学内寮 (東千田町、昭和26年廃止)
尚志寮 (東千田町、昭和38年廃止)
薫風寮 (皆実町、昭和40年廃止)
女子寮 (旧淳風寮東寮、東千田町、昭和31年廃止)
淳風寮西寮 (千田町、昭和38年廃止)
政経寮 (旧江波寮、江波町、昭和38年廃止)
女子寮 (江波町、昭和27年廃止)

東雲寮 (旧自治寮、東雲町、昭和42年廃止)
三原分校女子寮 (旧三原寄宿寮、三原市、昭和37年廃止)
工学寮 (千田町、昭和55年廃止)
高志寮 (旧福山分校男子寮、福山市、平成元年廃止)
清明寮 (福山市、平成元年廃止)
緑翠寮 (旧水畜産学部寮、福山市、昭和62年廃止)
山中寮 (千田町、平成8年廃止)

青雲寮 (千田町、平成8年廃止)
薫風寮 (出汐町、平成8年廃止)
池の上学生宿舎 (東広島市、昭和57年設置)

学生生活のいろいろ



第47回大学祭（平成10年）



第3回フェニックス駅伝（昭和40年12月12日）

昭和38年12月15日に広島大学～宮島間往復約40kmを「学長杯争奪フェニックス駅伝」と題して行われたのがはじまり。市民も参加し、学生が仮装して走るなど、お祭りムードもたよう。



天皇杯に出場したサッカー部
（ジュピロ磐田スタジアム・平成7年）

広島大学が開学した昭和24（1949）年、包括諸学校の学生団体・サークルは広島大学への包括後も活動を継続し、さまざまな文化系・運動系学生団体の結成に影響を与えました。教養部学友会が結成されると、多くの学生団体はそこに所属しました。当時はキャンパスの分散により、文化・芸術活動の進展には大きな障害があり、課外活動施設なども不十分でしたが、各団体はそれぞれ貧弱な施設と乏しい予算の中で活動を続け、学生団体の数は着実に増加していきました。

開学当初、学生団体には学術・研究を目的とするものが多くありましたが、やがて趣味や芸術を目的とする団体が多数を占めるようになりました。なかでも文化系団体では音楽関係の団体の増加が目立ちました。大学紛争の過程で教養部学友会が解体した後は、文化サークルの全学的な連合組織が結成されました。なかでも、音楽サークル協議会は、全学の構成員を会員資格とする音楽協議会に発展しました。

運動系学生団体も、開学当初公式に活動していたのは野球部・庭球部・卓球部・蹴球部・ラグビー部だけでしたが、学友会発足時には14の部が所属し、次第に数を増してやがて全学的組織として体育会を結成する動きにつながりました。昭和38年、学長を会長とする全学組織として広島大学体育会が設立されました。体育会初代会長の皇至道学長は、運動部の学生だけの組織ではなく、一般の学生に運動や体育に親しんでもらうことで大学全体のスポーツ振興を望んだのでした。

また、大学生活にすべての新入生が馴染みやすくするため企画されたのが、通称「オリキャン」と呼ばれる「新入生オリエンテーションキャンプ」でした。オリキャンは大学紛争の反省に立って教員と学生との相互理解を深める場を提供するため、体育会10周年記念行事のひとつとして昭和48年から実施されました。学生間の交流を図り、新入生が陥りやすい「五月病」を防ぐことも期待された行事でした。運営は体育会所属の学生を中心に進められ、大学が全面的に支援し、さらに文部省から特別な補助を受ける全国的にもユニークな全学行事でした。しかし娯楽性が高まり当初の役割が薄れたとの批判などにより、全学規模のオリキャンは平成4（1992）年をもってその姿を消しました。平成5年からは学部ごとにオリエンテーション行事が行われています。

開学3周年にあたる昭和27年、新制大学として最初の広島大学大学祭が文理大の閉学記念を兼ねて開催されました。講演を皮切りに、マリオネット、紙芝居、幻灯、映画、児童劇、音楽会、演劇会、展示会、運動会が記念行事として実施されました。大学祭は回を重ね、平成27年で64回目を迎えました。このほかに、六月祭や各キャンパスごとの祭も行われてきました。

大学祭では、その時代状況と学生の心象風景とを反映した統一テーマが掲げられてきました。一時期盛んだったダンスパーティーは衰退し、ステージが組まれるようになりました。講演会・展示などの企画は姿を消し、娯楽指向が強まる一方で、地域社会との連携が模索されています。現在は、東広島キャンパスでの大学祭、ゆかたまつりのほか、霞キャンパスで霞祭が行われています。



第43回中・四国
国立大学連合美術展覧会
(平成9年)

中・四国国立大学音楽美術
連盟は、昭和29年に発足し、
演奏会と美術展覧会とを開催してきた。



開学記念音楽会(昭和25年11月5日)
皆実分校講堂で開催された開学記念音楽会において、「
広島大学合唱団」は、広島女子大学合唱団・広島女学院大
学合唱団とともに「美しく碧きドナウ」を合唱した。



女子弓道部(平成11年)



茶道部による野点(平成10年)



『広大文学』(文芸部発行)



「オリキャン」の名物ともなった仮装
(包ヶ浦キャンプ場・平成元年)

グループごとに独特な服装をすることで連帯感を深める効
果もあったが、いかに目立つ格好をするかということに情
熱を燃やすグループも多かった。



総勢2,457名におよぶ参加者で行われた「オリキャン」
(包ヶ浦キャンプ場・平成2年)



東千田サークル棟での
チェロの練習
(室内合奏団・平成4年)

教育と研究



南極観測隊における
学術調査（昭和42年）
第9次南極観測隊に参加した時の
地衣植物の標本採集。



講義風景（教育学部東雲分校・昭和28年）



新入生に「楽勝」単位を伝授する広大壁新聞（昭和57年）

高校までに受けてきた教育と大学教育との基本的な性質の違いは、一定の履修に関する規制を除き、授業の選択が学生個人に委ねられていることです。このため学生には自主的な学習態度が要求されます。単に「教育を受ける者」を意味する「生徒」から、「学問をする者」の意に由来する「学生」へと呼称が変化するのもその表れのひとつです。

戦前の旧制大学は研究者養成や一部のエリートに教育する「研究教育」機関でしたが、戦後の新制大学は個人の能力に応じて誰もが進学することのできる「教育研究」機関へと変化しました。新制大学に導入された制度のひとつに一般教育（現在の教養教育）があります。一般教育は専門課程を深く理解させるため、あるいは大卒者として社会生活に必要な広く一般的な教養を学生に提供するための課程でした。しかし旧制大学の慣習ともいえる教員の研究志向の高さは一部に授業の軽視を生み、授業ごとの関連性の低さ、学生の恣意的な授業選択など実施上の問題も多くありました。

1960年代以降の学生数の増大や大学設置基準の大綱化、国立大学法人化といったその時代ごとの社会的変化に応じつつ、広島大学では教養教育と専門教育を両輪とする4年一貫の学士課程カリキュラムを理念に掲げ、「教養ゼミ」「パッケージ科目」「総合科目」など学生の変化に対応した教育内容の改善に努めてきました。平成19年度からは学生の将来設計に応じた適切な教育課程を提供するための教育プログラム「HiPROSPECTS（ハイプロスペクツ）」を導入しています。

教授方法や授業器具の進歩もあって、かつては自らの弁舌とチョークのみを武器に講義にむかった教員は、時代の変化とともにOHP、LL、ビデオを導入し、今では大規模なプロジェクター設備の利用も珍しくはなくなりました。これに加え実験・実習があり、近年はインターンシップに対する関心の高まりもあって、理系・文系を問わず各学部・学科においても、企業などで実習が行われるようになってきました。

開学当初の教員定員は全学で456名、50年後の平成11（1999）年には1,795名と約4倍に拡大し、教員の研究は、ほぼすべての学問分野におよんでいます。そのなかには特に優れた研究実績も現れました。たとえば理系では藤原武夫による金属結晶の研究、川村智治郎によるカエルの研究、文系では金子金治郎による菟玖波集の研究、今堀誠二による中国社会構造の研究、小林芳規による角筆の研究、沼本克明による日本漢字音の研究があり、それぞれ日本学士院賞を受賞しました（小林は恩賜賞も受賞）。

地域社会・国際社会との共存を理念のひとつに掲げる広島大学では、国際共同研究や国際学術調査といった学術交流活動にもとづいて、国際的に優れた研究業績を上げることに努めています。また平成9年に地域社会の協賛により発足した財団法人広島大学後援会（現公益財団法人広島大学教育研究支援財団）の存在は、学術交流のさらなる発展をうながす原動力となっています。



歯科検診 (平成11年)
各学部や講座などでも大学開放事業に取り組んでいる。



附属農場と農場実習
附属農場は学部よりも早く、昭和61年8月には東広島キャンパス東端の傾斜面に移転した。畜産を主とする農場であり、特に酪農に重点を置いている。上は学生の搾乳実習。



実験風景 (工学部・平成7年)



多人数の講義 (教育学部・平成11年)



練習船豊潮丸 (3代目)
呉市に基地のある豊潮丸は、漁業練習船であるとともに、海洋の調査研究船としての設備も備えており、動く「研究室」「学び舎」としての機能を果たしている。



日本学士院第70回授賞式に臨む今堀誠二 (昭和55年)

任意の結晶方向をもつ
アルミニウム単結晶の
製作過程
藤原武夫はこの単結晶を用いた研究により第38回日本学士院賞を受賞した。



新型角筆スコープと
角筆賞料

略年表

前 史

明治7(1874)年7月1日	白鳥学校(広島師範学校の前身)の創設
明治20(1887)年12月6日	広島高等女学校(広島女子高等師範学校の前身)の創設
明治35(1902)年4月1日	広島高等師範学校の設置
大正9(1920)年1月17日	広島高等工業学校(広島工業専門学校の前身)の設置
大正11(1922)年4月1日	広島県実業補習学校教員養成所(広島青年師範学校の前身)の設置
大正12(1923)年12月10日	広島高等学校の設置
昭和4(1929)年4月1日	広島文理科大学の設置
昭和20(1945)年4月1日	広島市立工業専門学校(現 広島工業大学)の設置
昭和20(1945)年8月5日	広島医学専門学校(県立広島医科大学の前身)の開校
昭和20(1945)年8月6日	広島に原子爆弾投下 包括校の死者676名(教職員92名、学生・生徒・児童584名、昭和20年末まで)
昭和22(1947)年12月23日	国立広島総合大学設立推進本部を県知事直轄として設置

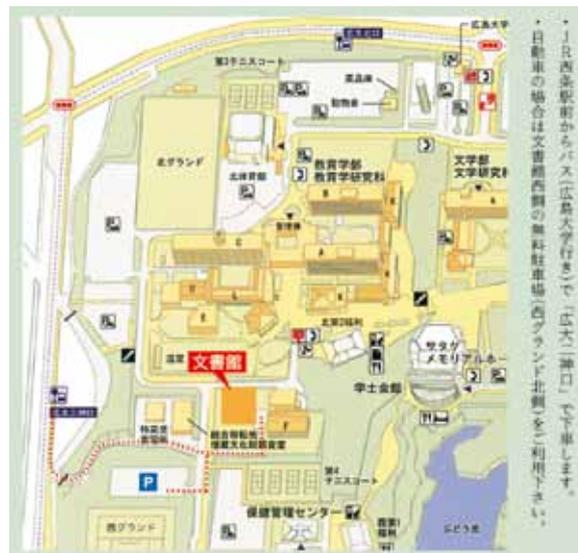
広島大学の歴史

昭和24(1949)年5月31日	新制広島大学の設置 旧制の諸学校を包括し、文学部、教育学部、政経学部、理学部、工学部、水畜産学部の6学部および教養部、附属図書館、理論物理学研究所をもって発足
昭和25(1950)年4月19日	元文部大臣森戸辰男が初代学長に就任
昭和25(1950)年11月5日	広島大学開学式の開催
昭和28(1953)年4月1日	新制大学院の設置(大学院文学研究科・教育学研究科・理学研究科)
昭和28(1953)年8月1日	医学部設置(県立広島医科大学の移管)
昭和31(1956)年1月20日	広島大学学章の制定
昭和36(1961)年4月1日	原爆放射能医学研究所(現 原爆放射線医科学研究所)を設置
昭和40(1965)年4月1日	歯学部を設置
昭和44(1969)年1月9日	広島大学学園問題全学共闘会議(広大全共闘)結成
昭和44(1969)年8月17~18日	警察力導入によって大学封鎖を解除
昭和47(1972)年5月1日	大学教育研究センター(現 高等教育研究開発センター)を設置
昭和48(1973)年2月8日	広島県賀茂郡西条町(現 東広島市)に統合移転することを正式決定・公表
昭和49(1974)年6月7日	総合科学部を設置
昭和52(1977)年5月2日	政経学部を分離改組し、法学部と経済学部を設置
昭和53(1978)年6月17日	教育学部東雲分校を廃止し、教育学部と学校教育学部(現 教育学部)に改組
昭和54(1979)年4月1日	水畜産学部を改組し、生物生産学部を設置
昭和57(1982)年3月31日	工学部が東広島市に移転完了
平成6(1994)年4月1日	広島大学初の独立研究科として大学院国際協力研究科を設置
平成7(1995)年11月1日	広島大学統合移転完了記念式典を開催
平成8(1996)年5月11日	全国共同利用施設・放射光科学研究センターを設置
平成10(1998)年4月1日	独立研究科として大学院先端物質科学研究科を設置
平成11(1999)年4月1日	大学院理学研究科を設置(理学部の大学院重点化)
平成11(1999)年11月5日	創立50周年記念式典及び祝賀会を開催
平成12(2000)年4月1日	教育学部及び学校教育学部を改組して新たに教育学部を設置
平成14(2002)年4月1日	大学院保健学研究科を設置
平成15(2003)年5月31日	サタケメモリアルホールの完成
平成16(2004)年4月1日	国立大学法人広島大学の発足
平成18(2006)年4月1日	大学院総合科学研究科を設置(大学院部局化の完了)
平成18(2006)年5月26日	宇宙科学センター附属東広島天文台の完成
平成26(2014)年9月26日	広島大学が文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」において「タイプA」に採択される。

資料提供のお願い

広島大学文書館では、前身校および広島大学の歴史に関わる資料の収集・保存を行っています。後世のためにお手もとの資料をご提供いただきますよう、お願い申し上げます。

広島大学文書館への交通案内



出典一覧 (敬称略)

○テーマ キャプション (出典・提供)

- 広島大学の源流 [文・小宮山道夫]
広島高等師範学校 (『第9回卒業アルバム 心師』)、広島女子高等師範学校 (石川博子)、元広島市立工業専門学校校舎 (広島市公文書館)
- 原爆と広島大学 [文・菅真城]
被爆後の復旧作業 (広島工業会)、南方特別留学生 (『生死の火 広島大学原爆被災誌』)
- 新制広島大学の発足 [文・菅真城]
開学式正門アーチ (西村博)、設立経費募金ポスター (広島県立文書館)、設立資金募集のためのプロ野球公式試合ポスター (広島県立文書館)、政経学部旧江波校舎 (『1955政経学部 (夜) 第1回卒業アルバム』)
- 発足を支えて [文・小池聖一]
広島アメリカ文化センターからの図書寄贈、森戸学長による記念植樹、教職員に見送られて退任する森戸学長、東千田キャンパス (以上4点西村博)
- 絶えざる自己変革 [文・菅真城]
バリエード封鎖、全共闘と飯島学長との団交 (以上2点中国新聞社)、総合科学部旧東千田校舎 (『フェニックス写真が語る広島大学一』)
- 統合移転でつづる広島大学 [文・石田雅春]
統合移転前の東千田キャンパス (エリオ写真出版)
- 理念と象徴 [文・菅真城]
森戸学長とフェニックス (西村博)
- 入試と学生 [文・小宮山道夫]
広島大学合格、若い人に負けない (中国新聞社)、合格電報の受付 (中国放送)、合格者には恒例の在校生による胴上げが待ち受けている (中国新聞社)、合格発表風景 (中国新聞社)
- うつりゆく学生生活 [文・小宮山道夫]
鍋を囲んでのゼミコンパ (石田晟)、学生帽 (『1956東雲分校卒業アルバム』)、昭和45年の森戸道路にて (大林正昭)、昭和58年の東千田キャンパスにて (『1984広島大学卒業アルバム』)、平成8年の東広島キャンパスにて (『1996広島大学入学アルバム』)、千田町・鷹野橋・皆実町界隈看板あれこれ (『フェニックス写真が語る広島大学一』)、開学当時の食堂 (寺林甲子郎)、東雲寮の生活スナップ (『1955東雲分校卒業アルバム』)、農家の納屋がマイホーム (中国新聞社)
- 学生生活のいろいろ [文・小宮山道夫]
第3回フェニックス駅伝 (『フェニックス』創刊号)、天皇杯に出場したサッカー部 (沖原謙)、東千田サークル棟でのチェロの練習 (『1993広島大学卒業アルバム』)、「オリキャン」の名物ともなった仮装 (『1990広島大学入学アルバム』)、総勢2,457名におよぶ参加者で行われた「オリキャン」 (西村清巳)
- 教育と研究 [文・小宮山道夫]
南極観測隊における学術調査 (柏谷博之)、講義風景 (『1955東雲分校卒業アルバム』)、新入生に「楽勝」単位を伝授する広大壁新聞 (中国新聞社)、実験風景 (エリオ写真出版)

なお、特に出典を記載していない写真は学内諸部局で所蔵するものや文書館に移管を受けたものである。提供や移管に当たってご協力頂いた担当者各位に謝意を表したい。

あとがき

広島大学文書館は、国立大学法人化とともに国立大学で二番目に設置されました。公文書室・大学資料室を中心に、森戸辰男記念文庫、平和学術文庫、梶山季之文庫等の特殊文庫を擁し、法人文書の管理・公開を行い、広島大学に関連する史資料を広く収集し、教育・研究に活用しております。一般の方もご利用できますのでお気軽なく、お寄りいただければ幸いです。また、前身諸学校を含め、関係する資料 (ノート、制服etc) がありましたら、是非ともご寄贈いただければ幸いです。

広島大学文書館は、ローカルな個性こそがグローバル化に最も必要なことだと考えております。ぜひ、ご支援・ご鞭撻の程、宜しく願いいたします。

広島大学文書館
館長 小池 聖一

広島大学の歴史

編集 広島大学文書館
〒739-8524 広島県東広島市鏡山1丁目1番1号
TEL 082-424-6050 FAX 082-424-6049
E-mail : bunsyokan@office.hiroshima-u.ac.jp
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/hua/>

発行日 2015年9月30日 改訂第4版
発行 広島大学文書館
印刷 (株)ニシキプリント